

(旧) 植民地で生まれ育った植民者

——ジーン・リースと森崎和江——

杉浦清文

はじめに

植民地主義が、エゴイスティックなナショナリズムに基づいて、海外に領土を拡張し人の移動を促したのであれば、その際、「(旧) 植民地で生まれ、(旧) 植民地で育った植民者」という存在も必然的に生み出された事実を忘れてはならない。英語圏の「ポストコロニアル文学」に親しんできた者ならば、「(旧) 植民地で生まれ育った植民者」と聞いて、ドミニカ出身の白人クレオール女性作家ジーン・リースを思い浮かべる者も少なくはないだろう。実際、日本において、「ポストコロニアル文学」研究の興隆とともに、リースの文学研究は盛んになりつつある。しかし、カタカナで表記される「ポストコロニアル」という概念は、西欧から地政学的に離れた位置から、まさに西欧の植民地主義の「後腐れ」をただ傍観するためにあるのではない。植民地主義という凄惨な権力体系は、かつての東アジアでも暴力的に作用していたのであり、しかもその体系は今も形を変えて生き延びようとしている。だからこそ、今もこうして残存する、日本の植民地主義の弊害を、私たちは責任を持って目撃していかなければならないだろう。こうした点を心に留めつつ、欧米系の「ポストコロニアリズム」の問題を、東アジアに纏わる「脱植民地主義」の問題へと関連付けたとき、「(旧) 植民地で生まれ育った植民者」の考察は、日本の引揚げ者たちの問題へと射程を広げていくことになるだろう。

本稿では、ジーン・リースの文学性と日本の引揚げ者である森崎和江の文学性に着眼していく。リースと森崎の生い立ちには、興味深い類似性が際立つ。白人クレオール、つまり、「(旧) 植民地生まれのイギリス人、白人」であるリースは、1890年8月24日にドミニカ島の首都ロゾーで生まれた。本名はエラ・グウェンドリン・リース・ウィリアムズ (Ella Gwendoline Rees Williams)。彼女は1907年、つまりは17歳になる1、2週間前にイギリスに渡り、ケンブリッジにあるパース女学校に入学した。しかし、イギリスの植民地ドミニカで生まれ育ったリースは、その後、イギリスに馴染めず、ましてやイギリス人になることに強い違和感を抱くことになる。他方、1927年、朝鮮慶尚北道大邱生まれの森崎は、「(旧) 外地で生まれ育った内地人」である。1944年、森崎は17歳のときに、福岡県立女子専門学校に内地留学し、彼女はその翌年の1945年に内地で終戦を経験する。終戦は、朝鮮半島での直接的な日本の植民地支配が終了したことを意味していた。森崎家は日本に引揚げることを余儀なくされる。しかし、日本の(旧) 植民地で生まれ育った森崎は、引揚げ後、日本人になることに違和感を持つ。その後、森崎は九州における社会運動や女性解放運動へと転進を図っていく。

ところで、リースと森崎は、幼年期において、被植民者である乳母に育てられており、二人は、それぞれ違った形で、そうした乳母との入り組んだ関係を告白している。また、森崎は17歳で

日本という祖国に渡り、1968年、40代になってはじめて生まれ故郷である朝鮮半島に帰郷しており、リースもまた、森崎と同じように、ほぼ17歳のときにイギリス、いわば祖国の地を踏み、1936年、40代にはじめて生まれ故郷のドミニカに帰郷している。もちろん、こうした共通点だけでも極めて興味深い。しかし、何よりも、注目すべき二人の共通点は、森崎が「内地知らずの内地人」であったならば、リースもまた、日本語風にいえば、「内地知らずの内地人」であったといえる点であろう。つまり、二人とも「(旧)植民地で生まれ育った植民者」であったのだ。

1. ジーン・リース

リースが「(旧)植民地生まれのイギリス人、つまりは白人」という意味でクレオールであったという点を再確認しておきたい。たとえば、今福龍太はクレオールについて次のように説明している。

＜クレオール＞は語源的にはポルトガル語の＜クリアール＞（育てる）とそれから派生した＜クリオウロ＞（新大陸で生まれた黒人奴隷）に由来する。歴史的に＜クリオウロ＞の意味は変化を見ており、これはまもなく新大陸で生まれたヨーロッパ人をも指すようになった。スペイン語圏でこれを＜クリオーリョ＞と呼びならわすようになり、フランス語圏、オランダ語圏、英語圏ではこれを＜クリオール＞と呼びならわすようになった。すなわちクレオールは第一に新大陸や他の植民地圏で生まれた白人および黒人（さらに後には、その混血）を意味したのであり、やがてその結果として彼らの習慣や言語をも指すようになったと考えられる。¹⁾

今福の言葉を借りるならば、リースは「新大陸で生まれたヨーロッパ人」という意味において、クレオールであった。つまり、彼女は、(旧)植民地生まれのヨーロッパ人、すなわち西インド諸島ではプランター階級の白人であった。リースのアイデンティティは、極めて複雑な様相を呈していた。たとえば、旧大陸のヨーロッパ人から「白いニグロ」と呼ばれ、同時に、新大陸の現地人や奴隷からは「白いゴキブリ」と呼ばれ、忌み嫌われた。

こうした複雑な白人クレオールのアイデンティティは、リースの代表作『サルガッソーの広い海』において描写されている。小説のヒロイン、アントワネットは、曖昧かつ複雑な白人クレオールの主体性を次のように表現している。

あれは白いゴキブリの歌。私のことよ。彼らがアフリカで身内から奴隷商人に売られてやってくる前からここにいた白人のことを、彼らはそう呼ぶの。イギリスの女たちも私たちのことを白い黒んぼと呼ぶんですってね。だから、あなたたちの間にいると、私はだれで、私の国はどこで、私はどこに属しているか、いったいなぜ生まれてきたのかいつも考えてしまうわ。²⁾

アントワネットのように、リースのアイデンティティもまた、「本物の白人」とされるイギリス

側の人間とドミニカにおいて人口的にマジョリティであるアフリカ系の人間との間で引き裂かれていた。

未完の自伝『お願い、笑って』において、リースが繰り返し「黒人になりたかった」と述べているのは有名である。しかし、白人クレオールであるリースの、黒人への同化願望は、必然的に入り組んだ心的プロセスを踏むことになる。イギリスが本国と言われようが、リースが、その本国の人間とされるイギリスの白い肌の人間よりも、故郷であるドミニカにおける、アフリカ系の黒い肌の人間のほうに親近感を感じていたことは確かだ。しかし、そうした黒人への同化願望が、完全な形で実現することは決してなかった。たとえば、その自伝ではまた、幼年期に見た、ドミニカのカーニバルを思い出す場面がある。カーニバルで生き生きと踊る黒人たちの姿を見て、リースは「黒人になって踊りたい」と思う。しかしながら、そのとき、彼女は黒人たちのそうした踊りが白人に対する激しい怒りを表現していることを知っていた。彼女は述べている——「いつものように、私の感情は入り乱れていた。というのも、私は仮面がとても怖かったからだ」³⁾。

とはいえ、ドミニカにおいて大多数を占める黒人たちの文化・社会は、リースにとってやはり身近に感じられた。その際、幼年期に親代わりとして存在したダーからの様々な戒めは、リースのアイデンティティ形成において大きな役割を果たしたといえる。つまり、白人クレオールの娘の心身が黒人の乳母の影響を通してアフリカナイズされた点是否定できないだろう。たとえば、『ユーマ』において、ラフカディオ・ハーンは、ダーと白人クレオールの娘の関係性を、次のように記している。

それというのは、白人の子供を預かる乳母は誰もがストーリーテラーだったからで、そうして育った子供たちが、最初に空想力をはぐくまれるのは、乳母のお伽噺を通してだったからである。こうして空想力は一旦はアフリカナイズされた。それは年長になってから受ける公教育をもってしても完全には除去できないほどの深い感化であった。⁴⁾

ここで、ハーンは、白人クレオールの娘とダーとを、深い愛情の中で結ばれたものとして描いている。さらに、白人クレオールの娘が、ダーのお伽噺を通してアフリカナイズされていたという、ハーンの説明も注目に値するだろう。何よりも、その影響が「年長になってから受ける公教育をもってしても完全には除去できないほどの深い感化であった」と説明されている点に引き付けられる。

しかしながら、リースのダーは、ハーンが描いたユーマとは性格が大きく異なっていた。彼女のダーであったメータも「ストーリーテラー」だったようだが、実際、そのメータから聞かされた話とは、心が弾むような昔話などではなかった。それは、西インド諸島の「ゾンビや狼男、吸血鬼」といった彼女に恐怖を植え付けるようなものであったという。ここにおいて、リースとダーの関係の中に、振じれた人種主義のイデオロギーが作用している点を見逃してはならない。リースとメータの間には、ハーンが見逃してしまった、白人クレオールの娘と黒人の乳母とのもう一つの関係性が見て取れるだろう。

メータには、私を平手打ちすることは許されていなかったし、彼女は決してそうしなかった。でも、そのかわり、彼女は、私の肩をつかんで私を乱暴に揺さぶり、鬱憤を晴らした。髪を振り乱しながら、私はまだ声を出す余裕があるうちに、「黒い悪魔め！黒い悪魔め！黒い悪魔め！」とさげんだものだった。私は、決してこのすべてのことを母に言いつけようとは夢にも思わなかった。もし私がそうしたとしても、うまく問題が解決したかどうかは疑問であった。しかし、メータがここから去ったとき、あるいは追い払われたとき、私の安堵感是非常に大きかった。私は、誰が彼女の後釜になったか、あるいは、実際、誰かが彼女の後釜になったのかどうかさえも思い出せない。しかし、いずれにしても、遅すぎた。私はダメージを受けていた。メータは私に恐怖と不信の世界を教えたのである。そして私はいまだその世界にいる。⁵⁾

リースは、メータによって「恐怖と不信の世界」を教えられたというが、彼女のこうした体験から判断する限り、黒人への同化願望に立ち塞がる、黒人たちへの恐怖と不信の感情は、幼年期において既に形成されていたことがわかるだろう。リースの心身のアフリカ化は極めて複雑な過程を辿ったといえる⁶⁾。

いずれにしても、このような複雑な人種的環境の中で幼年期を過ごしたリースが、1934年に出版された『暗闇の中の航海』において、白人クレオール少女アナとダーであるフランシーヌの関係に焦点を当てながら、そのアナが抱く、黒人への複雑な同化願望を描こうとした点は興味深い。この小説では、アナはダーであったフランシーヌを度々回想している。フランシーヌへの彼女の愛情は、黒人に感じる親近感の表れでもあり、こうした点はアナの次の言葉からも明らかである。

私は黒くありたかった。私はいつも黒くありたいと願っていた。フランシーヌがいてくれたから幸せだった。彼女の手が団扇を前後に揺らしているのを見ていた。そして、ハンカチーフの下から汗が伝うのを見た。黒いってことはあたたかくて明るいこと。白いっていうことは冷たく悲しいこと。⁷⁾

このアナの言葉において、フランシーヌの肌の色が強調されている点は重要である。アナは「黒さ」に対して肯定的なイメージを倍加させ、一方、「白さ」に対しては否定的なイメージを払拭できないでいる。もちろん、この小説における「黒さ」を優位に置く対比関係からは、白人中心主義的な人種差別的思考への対抗的ともいえる、リースの文学的な戦略を読み取ることができるかもしれない。『暗闇の中の航海』が出版された1934年という時期が、「黒人性」を積極的に再認識しようとした、ネグリチュード文学運動の萌芽期と重なっている点は示唆的である。これに関して、ケネス・ラムチャンドは、『暗闇の中の航海』を最初のネグリチュードの文学であると指摘したこともあった⁸⁾。

しかし、『暗闇の中の航海』を、黒人たちの「声」の復権を志向する、こうした文学運動と重ねようとすればするほど、白人クレオールの不協和音的な「声」が聞こえてしまうのは私だけだろうか。「ネグリチュード」が西インド諸島において声高に叫ばれつつあったこの時期に出版

された『暗闇の中の航海』を、その当時の歴史的事情を考慮に入れて、もう一度丁寧に読み直すことは、白人クレオールとしてのリースのアイデンティティを探るうえでも重要ではないだろうか。そうしたとき、この作品からは何よりも、「黒人」という存在に対する微妙な距離感が読み取れる。『暗闇の中の航海』において、リースは白人クレオールとしてのアナの入り組んだ感情を描写することに拘り続けた。彼女には、そうする必要があったように思える。たとえば、次の場面に注目したい。

フランシーヌは、そこで食器を洗っていた。彼女の目は煙で赤く、涙が流れていた。彼女の顔はかなり濡れていた。手の甲で目を拭い、彼女は私を横目を見た。それから、パトワで何かを言って、食器を洗い続けた。しかし、もちろん私は白人だったから、フランシーヌはまた私のことを嫌っているということを知っていた。そしてさらに、私が白くあることをひどく嫌っているということをフランシーヌに説明することなどできないこともわかっていて。⁹⁾

小説全般を通して、「黒さ」に対するアナの親近感を読み取ることは容易である。それはまた、黒人の乳母、フランシーヌへの愛情を通じて表されている。しかし、アナにとって、「黒さ」へ接近することは、アナ自身の心身に染み渡った「白さ」への自己憎悪の感情を引き起こすことにもなる。ともかくも、アナにとって、「黒人」という存在は、彼女自身にプランター階級の末裔としての「白人」という立場を常に再認識させ、彼女を責め立てるのだ。少なくとも、リースの幼年期の回想から推定するならば、ダー、または黒人という存在に対して、アナが感じる「白さ」への強迫観念は、まったく形が一緒ではないにしても、リース自身も持ち合わせていたものに違いない。

ちなみに、リースは、『暗闇の中の航海』が出版された2年後の1936年に、30年ぶりの帰郷を果たしている。その際、彼女は、幼年期に刷り込まれた、あの入り組んだ心情を改めて認識したのではないだろうか。このとき、自伝における、彼女の断片的なノートは極めて重要だといわざるを得ない。それには、「ジェネヴァ」(Geneva)というタイトルが付けられている。ジェネヴァは、かつて、リースの母方の家系が所有するプランテーションのあった場所である。リースはそこを訪れた際、次のように述べている。

ずっとあとになって、私は一度だけドミニカに戻ったとき、ジェネヴァを訪れるのにガイドが必要であると聞かされた。「ジェネヴァに行くのにガイド？なんてばかげてるの」、と私は思った。しかし、ガイドがいて、私たちは車ですぐに出発し、そのガイドは私を連れて行く場所がどこであるのか、正確にわかっているようであった。屋敷があったところは、空き地になっていた。ジェネヴァの屋敷は2回、いや3回は焼け落ちていた。私は、その空き地を眺め、そこにかつてあった屋敷、庭、スイカズラ、ジャスミン、高いシダの木を思い出そうとした。しかし、何もなかった。何もなかったのだ。見るものは何もない。言葉も出なかった。屋敷の土台さえもなかったのだから。¹⁰⁾

ここで興味深いのは、ドミニカ出身のリースに対して、それも彼女がよく知っている場所に行くというのに、「ガイド」が付けられてしまうことである。リースはそのことに驚きを隠し切れない。もちろん、リースの驚きは当然であろう。というのも、このガイドという存在、すなわち「この地をよく知っている者」としてのガイドは、反対にガイドをつけられてしまうリースの存在を「よそ者」として映し出してしまうからである。しかし、また、リースのこうした疎外感を検証するとき、ジュネヴァにあったという屋敷が焼失していたという点にも着目すべきである。西インド諸島では、奴隷解放後、白人クレオール屋敷が燃やされるといった事件が頻発した。実は、ジュネヴァの屋敷も黒人に焼かれてしまったようだ¹¹⁾。とりわけ、リースのこの帰郷に関する断片ノートを読めば、黒人の存在が浮かび上がるのは確かである。

ところで、リースは、1936年3月の初めにマルティニーク、セントルシアを訪れ、3月の終わりにはドミニカに滞在している。ここで興味深いのは、ネグリチュード文学運動の先駆者の一人であるエメ・セゼールもまた、1936年に、渡仏してから初めての帰郷（マルティニーク）を実現している点である。セゼールは、その年に『帰郷ノート』を書き始めたともいわれている。1930年代は、西インド諸島の歴史に即せば、「黒人性」が再確認された時期であった。セゼールの力強い「帰郷ノート」に比べて、リースの「帰郷ノート」は安定性に欠けている。こうした時期に帰郷を果たしたリースは、そのとき、以前にも増して、黒人という存在に対して敏感に反応せざるを得なかったであろう。そして、彼女は自分自身の「白さ」を改めて自覚するしかなかったのではないだろうか。ドミニカへの帰郷を通して、リースは故郷喪失感をより現実的に感じ取ったに違いない。

リースの本名が、エラ・グウェンドリン・リース・ウィリアムズであったことは先に述べた。しかし、彼女がグウェンドリン（Gwendoline）という名前を嫌っていたという話は有名である。その理由は、ウェールズ語で、このグウェンドリンが「白」を意味していたからだという。果たして、リースは、植民者の原罪を象徴する、この「白さ」を自らの心身から掻き消すことに成功したのだろうか。

2. 森崎和江

1979年、『諸君!』において、本田靖春は16人の引揚げ体験者を取り上げているが、ここでインタビュアーである本田自身が引揚げの体験者であることを考慮に入れるならば、読者はこのルポルタージュを通して17人の引揚げ者の「声」を聞くことになる。そして、こうした引き揚げ者たちのほとんどが、引揚げ後、戦後といわれる日本において、日本人でありながら、しかし日本人ではないという分裂した「私」と対峙せざるを得なかったという体験を共有している点は気になる。

戦後、日本社会は引揚げ者に対して、冷たい視線を注いだ。たとえば、三木卓は、「ぼくらが学校へ入っていくと、日本は食う物ないのに、お前らまで帰ってきた、とほかの子供にダイレクトにいわれるわけです。そうすると、あ、本当にすまないな、という感じはするわけです」¹²⁾とインタビューで語っている。三木のこの言葉からも、戦後の日本社会における引揚げ者たちの孤独な姿が浮かび上がる。ここで本田の言葉を借りるならば、引揚げ者たちの多くは、自分た

ちが「この国の人たちと、かなり異質だという認識を捨てることが出来ない」¹³⁾ のである。

しかし、日本人としての「私」に馴染めないからといって、引揚げ者たちの多くは、(旧) 植民地側の「私」として自己を確立させることもできなかった。本田はいう——「引揚げて来てから、かなり長いあいだ、私は自分を被害者の立場にばかり位置づけていたように思う。だが目を見開いて行くにつれ、被害者だとばかり信じ込んでいた自分が、実は異民族に対して加害者の立場にいたのだという、どうにも否定しようのない事実を認識させられたのである」¹⁴⁾ と。ここに、引揚げ者としての本田の引き裂かれた「私」の声が聞こえる。日本人でありながら、(旧) 植民地側の間人でもあり、しかし、日本人でも、(旧) 植民地側の間人ともいえない「存在者」。何よりも、引揚げ者たちにとって、「私」探しの旅は、「加害者」、いわば植民者としての原罪を強く意識することになる、痛々しい自己省察を促すものである。

森崎和江もまた、「(旧) 植民地で生まれ育った植民者」であり、本田、さらには彼がインタビューした引揚げ者たちと同じような経験を共有していた。戦後日本において、森崎も分裂した「私」という感覚を捨て切れずにいた。引揚げ後の戦後日本において、彼女は「私」という言葉の意味がわからなくなる。「朝鮮断章・1——わたしのかお——」の中で、彼女は次のように述べる。

私は朝鮮で日本人であった。内地人とよばれる部類であった。がしかし、私は内地知らずの内地人にすぎない。内地人が植民地で生んだ女の子なのである。その私が何に育ったのか、私は何になったのか。私は植民地で何であったのか、また敗戦後の母国というところで私は何であったか（いや何であろうと骨身をけずったか。私は、ここで、このくにで、生まれながらの何かであるという自然さを主観的に所有していなかったのである。私は何かであろうと、自分の力で可能なかぎりの生き方をした。まるで失った何かをうばいかえそうとでもするかのように）」¹⁵⁾

森崎のこうした入り組んだ「私」の様相には、白人クレオール複雑なアイデンティティとの類似性が目立つ。森崎の言葉は、先に見た、『サルガッソーの広い海』における、アントワネットの言葉を髣髴とさせるだろう。

ちなみに、内地を知らずに育った森崎は、日本の(旧) 植民地、いわば(旧) 外地の朝鮮の文化的影響を受けて育った。そんな森崎にとって、乳母(オモニ、ネエヤ)の存在は極めて重要であったといえる。森崎は「私」というアイデンティティが、彼女の生まれ育った朝鮮によって作られたという点を実感し、何よりも朝鮮人の乳母の愛情を通じて形成されたことを認めている。こうした中で、森崎の耳には、「オモニ」という音が、とりあえずは心地よく鳴り響く。

オモニということばは、おかあさんという朝鮮語だ。朝鮮の子供らは「オモニ！」と呼ぶ。幼ない子は「オンマア！」という。よいひびきをもつ語である。朝鮮にいた日本人らはその家庭で家事をしてくれる手伝いの朝鮮婦人をオモニとよんだ。手伝いの少女は日本ふう^{ママ}にネエヤといった。オモニやネエヤは私らの育つ間中私の身近でふれることのできるふんわりと大きな座ぶとんのようなものだった。その中で私らは味噌汁を吸い、朝鮮ふうのつけものを食べ、朝鮮ふうにつくろってもらった衣服をつけて学校へ通ったのである。私に

は母の背におぶわれた記憶は残っていないけれども、オモニの背中のぬくもりと髪の毛が頬や唇にあたっていた記憶は残っている。¹⁶⁾

森崎の幼年期の記憶は、オモニへの愛情で埋め尽くされており、とりわけオモニへの感謝の気持ちは、引揚げ後の日本での生活の中でさらに膨れ上がってきたといえる。森崎とオモニのこうした関係は、ハーンが描いた『ユーマ』の世界を、新たな視点から眺め直すことを可能とさせるだろう。森崎は、幼年期、昔話をオモニやネエヤからよく聞かされたことを懐かしく思い出している¹⁷⁾。

しかし、オモニに対する、森崎のこうした追想を、失われた幸福な時を取り戻す経験として容易に理解してよいのだろうか。森崎のオモニへの愛情はあまりにも深い。ここで気にかかるのは、なぜ、森崎がオモニへの愛情をこれほどまでに意識せずにはいられないのかという点である。森崎にとって、オモニへの深い愛情は、まさに彼女が植民者であるにもかかわらず、そんな彼女を育ててくれたという、深甚なる謝意の表れでもある。しかし、オモニへのそうした感謝の念を表面化させることは、同時に自己に対する憎悪の念を剥き出しにする結果ともなる。つまり、森崎にとって、彼女に優しく接してくれたオモニの姿を想起すればするほど、「(旧)植民地で生まれ育った植民者」としての彼女自身の原罪を再認識せずにはいられないのである。もちろん、逆もありうるだろう。つまり、森崎自身が「日本人」としての罪を背負えば背負うほど、オモニへの愛情と感謝の気持ちを増幅させるということである。どちらにしても、森崎にとって、「オモニ」という言葉の響きは、一方においては、幼年期に慣れ親しんだ「オモニの背中のぬくもり」を想起させるものではあるが、他方では、抑圧しようとしてもできるはずのない「日本」、「日本人」という、植民者としての自己の姿を強迫観念的に自覚させるものでもあるのだ。

ところで、「オモニ」への愛情、そして、そこから必然的に浮かび上がってくる植民者としての自己嫌悪を、森崎がより現実的な形で感じ取ったのは、引揚げ後のはじめての帰郷においてであっただろう。1968年、森崎は41歳の時に、韓国の慶州中高校の創立30周年記念祝賀会に亡くなった父の代わりに出席するが、彼女にとってこの帰郷は特別な意味を持っていた。1984年に出版された『慶州は母の叫び声』の中で、森崎はその時の心境を表しているが、まず、この本のタイトルにおける「母」が「オモニ」を示唆している点は重要である。たとえば、この本の「あとがき」で、森崎は以下のように述べている。

書くまでにかかなりの月日を必要としました。書こうと心をきめたのは、ただただ、鬼の子ともいふべき日本人の子らを、人の子ゆえに否定せず守ってくれたオモニへの、ことばにならぬ想いによります。¹⁸⁾

ここで、森崎が、オモニに対する深い愛情と、何よりも、そこから必然的に生じる凄まじいまでの自己嫌悪の感情を吐露している点を見過ごしてはならない。森崎のオモニへの愛情は、「日本人」としての彼女自身の原罪と表裏一体にあるのだ。

「鬼の子ともいふべき日本人」——この罪の意識は、さらに1985年に再び韓国を訪問したと

きも容赦なく森崎に迫りくる。この1985年の韓国訪問については、『こだまひびく山河の中へ』で、その入り組んだ心境を表している。そこでは、まず、韓国が様変わりした点を指摘しており、森崎は韓国の風景の変貌に驚きを隠し切れない。たとえば、彼女はその変貌を次のように記述している。

一九八五年の二月の、とある日、私は韓国の町を元気よく歩いていた。しびれるような心の痛みは、ひそんでいるリュウマチのように、まだ出てこない。風は冷たいが早春の大邱市の中心街に若者があふれていた。日曜日は歩行者天国になるのだ。楽隊がデパートの前で演奏している。子ども連れや中年の男女も立ちどまる。[中略] 若者のファッションは日本とちがわない。女の子はパンツが多い。ポシェットをぶらさげている。男の子と手をつないで歩く。チマチョゴリを着た娘をまだ見ていない。¹⁹⁾

一見、ここで森崎は、1968年の帰郷から、韓国が様変わりした様子を記し、それに伴い、彼女の心の痛みも和らげられたかのような書き方をしている。しかし、あの「しびれるような心の痛みは、ひそんでいるリュウマチのように、まだでてこない」だけである。つまり、「日本人」としての原罪意識とその痛みは、まさにリュウマチのように突然彼女を襲うのだ。

半島の大地に立てば、北の国境には鴨緑江と豆満江の大河が流れ、河はそれぞれの神話を持ち、その先に中国大陸があるのだというはるばるした思いが湧いていた。長く太い半島は大陸の気風と、海洋性とを、絶えることなく内部に還流し、島国の感性にはない悠揚追らぬ感情を育てていた。それはこの半島が半島の特質を古代から生ききっていたからにはほかならない。そうした歴史と大地が分断された。分断は陸の離島化を意味してしまう。幼時の私を背負ってくれた女性の体臭が心に浮き上がる。土くさく海くさく、はるばると大陸を感じとらせた若い娘の背中。半島の精神。そのあたたかな息吹きが眠りがたい心にひびく。この半島を侵した植民者二世の四十年後の痛みとなって、鳥が通う大空があおあおとひろがる。²⁰⁾

1945年、日本は敗戦を経験したが、それは朝鮮民族の解放、すなわち脱植民地化の歴史の始まりであった。しかし、その日本の敗戦は、日本のかつての植民地主義の遺産が完全に清算されたことを意味してはいなかった。日本はポツダム宣言を受けて、無条件降伏をしたが、朝鮮半島は北緯38度線を境として南北に分断される。北に朝鮮民主主義人民共和国、南には大韓民国が樹立され、ソビエトとアメリカがそれぞれ分割統治していったのである。そして、1950年には朝鮮戦争が勃発する。森崎の心が痛むのは、こうした朝鮮半島の南北分断であり、そして、何よりもその分断の責任が、かつての植民者であった「日本人」にもあるからである。

二度の韓国訪問で、森崎は敗戦後においてもなお、朝鮮半島に残されている、日本の植民地主義の後遺症に衝撃を受けている。森崎は、朝鮮半島が、いまだに日本の植民地主義からの脱植民地化の過程にあるということを実感するのである。そして、そうした中で、「日本人」であるということの罪責感が、森崎の心身を鞭打つのであり、そのとき彼女は、故郷である朝鮮半

島に対する複雑な感情を倍増させていくのであった。

おわりに

リースと森崎の物語を、「(旧)植民地で生まれ育った植民者」という観点から比較文学的に考察することは、日本における「ポストコロニアリズム」の研究を発展させるとともに、東アジアという場から「脱植民地主義」に関する新たな問いを欧米に投げ返すことにもなるだろう。リースと森崎は、祖国とされるイギリスや日本、さらにはイギリス人や日本人に馴染むことはできなかった。しかし、だからといって、二人が、生まれ育ったドミニカや朝鮮、またはドミニカの黒人や朝鮮人に対して、何のためらいもなく帰属意識を抱くことは極めて困難であった。故郷での幼年期の乳母の記憶にしても、それは単なる古き良き時代への郷愁として回顧されるようなものではなかった。被植民者である乳母は、リースにとっては、「白人」という支配者の立場を、森崎にとっては、「日本人」という支配者の立場を、反復強迫的に常に意識させるような存在であったのである。リースと森崎が、帰郷という体験を通じて抱いた故郷喪失感も、脱植民地化のプロセスの中で、少なくとも、こうしたトラウマ的な自己意識が伴って生み出されたと考えられる。

そのような点を踏まえれば、リースと森崎が紡ぎ出す、(旧)植民地を舞台とする物語は、植民地主義の支配者という原罪と絶えず向き合った、苦渋に満ちた自己省察から生み出されたものだといえる。こうした作品は、植民地主義の「後腐れ」が生み出した暗澹たる物語の一つなのである。まさにここに、二人の文学における極めて重要な共通点を見出すことができるだろう。いずれにしても、こうした比較文学的な考察は、イギリスと日本の歴史、文化・社会的な相違点を語るだけでは終わらない、植民地主義の「後腐れ」を巨視的な視野で問い質す、新しい比較文学研究の始まりとなるに違いない。

注

- 1) 今福龍太『クレオール主義』、ちくま学芸文庫、2003年、pp. 219-220。
- 2) Jean Rhys, *Wide Sargasso Sea* (London: Penguin Books, 2000), p. 85. 日本語訳は、小沢瑞穂訳ジーン・リース『サルガッソーの広い海』、『世界文学全集Ⅱ-01 灯台へ／サルガッソーの広い海』、河出書房新社、2009年、p. 355を参照したが、一部改訳した。
- 3) Jean Rhys, *Smile Please* (London: Penguin Books, 1981), p. 52.
- 4) Lafcadio Hearn, *The Writings of Lafcadio Hearn: in Sixteen Volumes. Vols.3-4.Reprint.* (Originally published in Boston: Houghton Mifflin, 1922), p. 282. 平川祐弘『カリブの女』、河出書房新社、1999年、p. 158。
- 5) Rhys, *Smile Please* (London: Penguin Books, 1981), pp. 31-32.
- 6) たとえば、中村和恵は次のように述べている。「リースの創造力はたしかに、プランテーション・アメリカの多くの白人の子供たち同様、黒人の乳母の物語を通して「アフリカ化」されたが、それは彼女を安らかに楽しませるところか、不安とヒステリアの源となる魑魅魍魎の世界として長く影響を及ぼしたのであった。」中村和恵「黒人の乳母——ラフカディオ・ハーンとジーン・リース」、『国文学』、2004年10月、p. 126。
- 7) Jean Rhys, *Voyage in the Dark* (London: Penguin Books, 2000), p. 27.

- 8) Kenneth Ramchand, "Intorducction to this Novel" in Samuel Selvon, *The Lonely Londoners* (Jamaica: Longman Group Limited, 1956), p. 3. しかし、後に、別の論考において、ラムチャンドは、白人クレオールが黒人に対して抱く恐怖感について言及し考察を深めている。Ramchand, *The West Indian Novel and Its Background* (London: Faber and Faber, 1970), pp. 224-225.
- 9) Rhys, *Voyage in the Dark*, p. 62.
- 10) Rhys, *Smile Please*, pp. 37-38.
- 11) キャロル・アンジアは、1930年代の初めにもジェネヴァの屋敷は燃やされたと説明している。Carole Angier, *Jean Rhys* (London: Little, Brown and Company, 1990), p. 357.
- 12) 本田靖春「日本の“カミュ”たち——「引揚げ体験」から作家たちは生れた」『諸君!』1979年7月号, p. 207。
- 13) 本田, 同上論文, p. 199。
- 14) 同上。
- 15) 森崎和江「朝鮮断章・1——わたしのかお——」森崎和江『ははのくにとの幻想婚』, 現代思想社, 1970年所収, pp. 212-213。
- 16) 森崎和江「朝鮮断章・2——土堀——」森崎和江『ははのくにとの幻想婚』, 現代思想社, 1970年所収, pp. 227-228。
- 17) たとえば、森崎は次のように述べている。「オモニの生活内容を知らず、そのことばも知らず、しかもそのかおりを知り、肌ざわりを知り、髪の毛を唇でなめ、負ぶってもらい、やきいもを買ってもらい、ねむらせてもらった。昔話をしてもらった。」森崎和江「朝鮮断章・1——わたしのかお——」, p. 214。さらにまた、次の森崎の言葉から、彼女自身の心身がオモニによって、いかに朝鮮化されたかが理解できるだろう——「たとえば私が絵本を読む。すると農夫のもとへ鶴がたずねておよめさんになる絵がかいてある。私はその絵本をみながら、白衣にチゲをかついで行く朝鮮人の若者を連想し、文金高島田のおよめさんを連想するのである。自然にそうになっている。そうでないと物語のところが読めないのだ。」森崎「朝鮮断章・1——わたしのかお——」, pp. 218-219。
- 18) 森崎和江『慶州は母の呼び声——わが原郷』, 洋泉社, 2006年, p. 243。
- 19) 森崎和江『こだまびびく山河の中へ——韓国紀行八五年春』, 朝日新聞社, 1986年, p. 8。
- 20) 同上書, p. 41。

主要参考文献

- 今福龍太『クレオール主義』ちくま学芸文庫, 2003年
- 中村和恵「黒人の乳母——ラフカディオ・ハーンとジーン・リース」, 『国文学』, 2004年10月, 117-128
- 西成彦「日本語文学の越境的な読みに向けて」『立命館言語文化研究』22巻4号2011年3月, 179-186
- 「カンナニの言語政策」『立命館産業社会論集』第48巻第1号2012年6月, 31-46
- 朴裕河「引揚げ文学論序説——戦後文学のわすれもの」, 『韓国日本学報』第81輯2009年, 121-130
- 平川祐弘『カリブの女』, 河出書房新社, 1999年
- 本田靖春「日本の“カミュ”たち——「引揚げ体験」から作家たちは生れた」, 『諸君!』, 文藝春秋, 1979年7月号, 198-225
- 森崎和江『ははのくにとの幻想婚』, 現代思想社, 1970年
- 『こだまびびく山河の中へ——韓国紀行八五年春』, 朝日新聞社, 1986年
- 『慶州は母の呼び声——わが原郷』, 洋泉社, 2006年
- 中島岳志『日本断層論——社会の矛盾を生きるために』, NHK出版, 2011年
- Angier, Carole, *Jean Rhys* (Harmondsworth: Penguin Books, 1985)
- Hearn, Lafcadio, *The Writings of Lafcadio Hearn: in Sixteen Volumes. Vols.3-4. Reprint.* (Originally published

- in Boston: Houghton Mifflin, 1922)
- Hulme, Peter, *Remnants of Conquest: The Island Caribs and their Visitors, 1877-1998* (Oxford: Oxford University Press, 2000)
- Ramchand, Kenneth, "Intorducction to this Novel" in Samuel Selvon, *The Lonely Londoners* (Jamaica: Longman Group Limited, 1956)
- The West Indian Novel and Its Background* (London: Faber and Faber, 1970)
- Rhys, Jean, *Smile Please* (London: Penguin Books, 1981)
- Voyage in the Dark* (London: Penguin Books, 2000)
- Wide Sargasso Sea* (London: Penguin Books, 2000) [ジーン・リース『サルガッソーの広い海』小沢瑞穂訳, 『世界文学全集Ⅱ - 01 灯台へ／サルガッソーの広い海』, 河出書房新社, 2009年所収, 269-441]